

中札内村観光振興基本方針



十勝幌尻岳

2026年(令和8年) 4月

中 札 内 村

* * * * * 目 次 * * * * *

I	はじめに	1
II	観光資源とめざすべき姿	1
III	交通アクセス	4
IV	主要観光施設	
	1 道の駅なかさつない	5
	2 札内川園地	7
	3 一本山展望タワー	10
	4 桜六花公園	10
V	観光振興とイベント	11
VI	観光推進体制と民間観光施設等との連携	12

中札内村観光振興基本方針

I はじめに

観光は近年、地域経済活性化のための重要施策として位置づけられ、地域の発展や活性化にとって大きな役割を果たすものと考えられている。

また、時代の流れに伴う観光動向や観光客志向の変化への対応、観光資源・文化的資源・地元産業等との連携が不可欠となっている。

こうした情勢の中、本村がもつ生活文化、自然環境の特性を再認識したうえで総合的な分析を行い、本村の優れた特性を大切に守りながら、今後の観光振興の方向性を明確に位置づける中で、住民と行政の協働はもとより、民間企業との連携による体制整備を進め、観光を軸とした交流人口の増加を図っていく必要がある。

本村の個性と魅力ある資源を活かし、自立した村づくりを進めるため、更なる村の魅力向上と地域経済の活性化を目的として、本村の観光振興における基本的な方向と具体的な取り組みの設定を行い、今後の指針とするため本方針を策定するものである。

なお、本方針は、「第7期中札内村まちづくり計画」（以下、まちづくり計画）に基づく個別計画として位置づけ、まちづくり計画との整合性を図る。

II 観光資源とめざすべき姿

【現状】

中札内村は、日高山脈を源とする札内川の上・中流に沿って細長く形成され、豊かな自然と肥沃な大地に恵まれている。

山岳・溪谷地については、北海道が誇る日高山脈襟裳十勝国立公園の大自然を生かした札内川園地があり、特に「ピョウタンの滝」は雄大な自然を求めて訪れる方に感動や癒しを与える空間として、これまで中札内村観光のシンボルに位置付けられてきた。このような美しい自然環境を守り、雄大な自然を快適に体感していただくことを目的に札内川園地内のキャンプ場を令和3年度から指定管理者制度を導入している。今後も日高山脈に抱かれた豊かな自然を守り後世に残していくため、国立公園（札内川園地）の適正な保護及び利用の促進が求められている。

また、農村地域においては十勝平野に広がるパッチワーク状に整理された畑や耕地に植えられた防風林等が整備され、農業に寄り添った生活から生まれる美しい農村原風景は見る人

に感動を与えている。「防風保安林に守られた農村原風景」は、平成28年に加盟した NPO 法人「日本で最も美しい村」連合の登録地域資源でもあり高く評価されている。

このほか、本村の「花の村づくり」の活動は、村の重要な観光資源として広く周知された花づくり事業などを行っており、自然豊かな村内の景観に花を添えることで訪れた人を楽しませている。また、村内には民間企業による六花亭アートヴィレッジ中札内美術村や六花の森、グランピングリゾートフェーリエンドルフや花畑牧場等の観光施設があるほか、村では道の駅、札内川園地、桜六花公園等の整備などを行ってきており、観光資源としては優れたものをもっている。

しかし、気候的条件によって11月から3月までの集客が見込めず、観光施設等の冬期間の閉鎖はやむを得ない状況下にある。約65万人（令和6年度入込客数）が訪れる「道の駅なかさつない」も例外ではない。

近年は、(株)そらや日本航空(株)（JAL）といった民間企業と包括連携協定を締結し、新たな地域振興・観光政策を展開している。

【課題】

村にはさまざまな魅力ある観光資源があるが、その土地ならではの魅力を掘り下げて誘客につなげる「地域ブランディング」の取組みに欠けている。今一度、本村の魅力がどこにあり、限られた財源をどこに投入していくか立ち止まって考える時期にきている。そこで本村最大の観光入込客数を誇る道の駅なかさつないでのアンケート調査等による分析が有効だろう。そのうえで、観光資源を結び情報発信拠点である道の駅を中心に総合的に村の魅力を発信することがますます重要である。

札内川園地は、指定管理者制度導入以降、利用者の満足度は上昇傾向にあり入込客数も3千人以上を維持しているが、さらなる入込客数の増につなげる方策を検討する必要がある。

観光資源としても位置づけられる「防風保安林」と「花づくり」は、それぞれ農業機械の大型化に伴う防風保安林の伐採や、花づくりの担い手不足などの課題があり、貴重な観光資源ではあるが覚束ないのが実情である。

村内には優れた民間施設が数多くあるが、本村と連携した取り組みは多くない。今後は、包括連携協定を締結した企業をはじめ、民間との連携した効果的な手法を検討していくことが重要である。

また、外国人観光客を含む多様なニーズに応えられるよう、地域資源を活かした新たな観光メニューを推進し、体験型・滞在型観光の充実を図るとともにキャッシュレス決済の導入など受入体制を整える必要がある。

冬季の閑散期の解消へ向けては、本村で実施してきた独自イベントである「スノーアートヴィレッジなかさつない」があるが、一過性のイベントとして完結してしまっている。

このほか、基幹産業である農業（畑作、酪農、畜産）を観光と連動させ、豊かな地場農畜

産物や「食」などの資源を有効的に活用する中で、独自のブランド化と魅力ある地域としての印象を定着させる取組みも必要である。

【今後の方向性】

これまでも恵まれた自然環境や魅力ある観光施設、花や芸術が楽しめる観光地として道内では一定程度認知されてきたが、全国からみれば認知度は高くない。今後も中札内村ならではの強みである地域資源（食、景観、アート、花づくり等）を活かした観光振興に取り組み、村の魅力を最大限引き出していく。また、新たな観光メニューとしてアドベンチャートラベルやサイクルツーリズム等を検討する。ただし、本村の財源をふまえると観光分野の戦略を総花的に進めるのは効果的ではないため、「選択と集中」を方針の根底に据えることとする。

今後の方針を決定するうえでデータが不足していることから、道の駅なかさつないにおいてアンケート調査を実施し分析をすすめる。

札内川園地については、日高山脈襟裳十勝国立公園指定の好機を活かし、新たなアウトドア等の拠点として更なる魅力向上のため、ガイドを配置するほか展示物の見直しを図る。また、入込客数は、国立公園の保護及び利用の推進を念頭に利用者の満足度の向上やガイド人材を活用した新たな体験メニューの創出による対前年比増を目標として効果的な手法を検討する。

「防風保安林」や「花づくり」は、観光に限らず村の重要な資源である。次代へ守り継承していくため「防風保安林」の有効性の普及啓発を図るほか、「花の村」として継続して維持管理ができる体制の構築と多くの村民に花に興味、関心をもってもらえるような取組みを実施する。令和6年度からは、村民が気軽に花づくりに取り組めるよう花苗等の購入費に対し助成を行っている。今後も花づくりのすそ野を広げるような施策を推進していく。

村の「食」のPRについては、「道の駅なかさつない」や平成29年にオープンした「JA中札内村直売所」が地元の方や外国人等のあらゆる観光客に、本村の優れた農畜産物等を手軽に入手できる施設として人気がある。北海道開発局が発表した道内の道の駅ランキング2024では、「いちおしの“おいしいもの”」で8位に輝いた。今後は、道の駅の長寿命化を図っていくとともに、ふるさと納税の返礼品や物産展への出店などあらゆる手段を活用してPRしていく。また、訪日外国人観光客に対応するため、キャッシュレス決済の導入や多言語対応などの受入体制の整備を推進する。

また、「スノーアート」を本村独自の冬季の観光資源として再定義し、有効活用する方法を検討する。

村は、令和8年に「日本で最も美しい村」連合加盟10年の節目を迎え、令和9年度には景観計画を策定し、十勝管内唯一の景観行政団体へ移行する予定である。優れた資源である「景観」と「食」を活かした事業を推進し、中札内村のファン（頻繁に来村する人、村に友人・知人がいる人、ふるさと納税者、村出身者など）を獲得していく。

当面は、本村の最大の観光入込客数を誇り、村の観光の屋台骨である中札内村観光協会が指定管理者として支えている道の駅なかさつないを中心に事業展開をすすめていく。

Ⅲ 交通アクセス

【現状】

本村の商業地域は、国道236号線沿いに形成されており、帯広市の近郊に位置することから、十勝圏住民が気軽に足を運ぶことができる。また、帯広・広尾自動車道の中札内ICがあり、観光客が訪れやすい環境にあることからバスツアー客を含め多くの方が訪れている。ただし、タクシー事業者の不在や十勝バス（広尾線）が減便されるなど公共交通が弱体化しており、自家用車やレンタカーがなければ村内を周遊しづらいのが実情である。

また、とちかち帯広空港から車で15分程度の至近距離にあるが、空港から本村まで直接結ぶ公共交通機関が無い、レンタカー等の自動車による移動が主体である。

一方で管内の観光バス周遊ルートには、六花亭アートヴィレッジ中札内美術村や六花の森があり、周遊ルートを活用して多くの方が中札内村に訪れている。

令和7年に帯広と韓国を結ぶ国際定期便が就航したため、今後、訪日外国人観光客の誘客が期待される。

【課題】

道の駅に集中する観光客を本村の商業地域や、他の観光施設等へ誘導することで村内を周遊していただき滞在につなげることが必要である。

このほか、帯広空港から本村を直接つなぐ移動手段がレンタカー等に限定されていることや、村内を観光客が気軽に周遊する手段の確保が課題となっている。一部の旅行会社等において周遊ルートとして利用いただいているが、村単独ではなくとも観光客ニーズに合わせ、目的を持った観光周遊ルートなどの宣伝PRを対外的にも進めて行くことが必要である。

【今後の方向性】

“本村へのアクセスの確保”が最重要ポイントとなる。帯広空港の近郊に位置する優位性を活かすため、最も効果的な移動手段の確保へ向けて取り組んでいく。

また、北海道観光は、新千歳空港の利用が過半数を占め道外から道東を目的地として訪れる方は多くない。帯広市や近隣自治体はもとより観光事業者等とも連携を図りながら、十勝の魅力出道外へ発信し観光需要の掘り起こしをすすめていく。観光協会ではバスツアー「中札内うまいもんめぐり」を開催し、道央圏の観光客から好評を得ている。利用者の声を反映し、より魅力的なツアーを今後も継続していく。

IV 主要観光施設

1 道の駅なかさつない

【現状】

村の観光情報発信拠点でもある「道の駅なかさつない」については、観光情報発信機能の充実（【参考】北海道内の観光協会 SNS（X）フォロワーランキング4位（令和7年11月時点））や観光客が気軽に立ち寄り憩いの場を創設するなど村の魅力発信拠点として機能充実を図り、入込客数・販売額増へ一定の効果を上げている。

令和3年度の改修工事に伴い、「中札内村観光協会」の事務所が令和4年4月にカントリープラザに移転したことに加え、屋内キッズスペース、授乳室、EV急速充電器の設置など観光客が気軽に立ち寄りやすい環境となった。

リニューアル後20年を経過した本施設は、この間一部改修工事を実施しているが物産販売所をはじめとした各施設の床や外壁等の老朽化等、経年劣化が著しい。また、令和5年度に開拓記念館内で営業していた飲食店が閉店したことに伴い、道の駅のアンケートや利用者から飲食店を求める声が多い状況にある。また、北海道開発局が発表した道内の道の駅ランキング2024では、「いちおしの“おいしいもの”」で8位に輝いた。

【課題】

国道に面した道の駅が中札内村全体の情報発信基地としての大きな役割を担うことから、村内の観光施設だけではなく、中札内村近郊も含めた観光情報の収集・提供が求められている。老朽化した施設の長寿命化を図るほか、施設内の照明のLED化も合わせて実施する必要がある。そのほか、冬期間はテナントの閉店もあり、利用者が夏期間の10分の1程で推移している。また、道の駅開設時から入居しているテナント店舗は個人事業主が多く、将来的に事業継続・後継者確保が課題となる。

道の駅の使用料については、令和5年の北海道電力の電気料見直しにともない実費相当分と乖離がみられる。ただし、気軽に購入できる価格帯のテイクアウト商品等が地元客・リピーター客からの人気を維持する理由の一つと考えられ、使用料改正分が商品価格へ転嫁された場合、入込客数が減少する懸念があり、気軽に立ち寄れる道の駅のスタイルを崩しかねない。

そのほか外国人観光客のニーズに応えられるよう、キャッシュレス決済の導入や多言語化対応など受け入れ体制を整える必要がある。

アンケートは、常時行っているが意見の数が少なく有効な分析には至っていない。

【今後の方向性】

「道の駅」は、本来道の駅が果たすべき機能を充実させ、利用者の快適性や利便性を図るとともに、憩いの場の創出や新鮮で安全な地元農畜産物や地元食材にこだわった食事の提供

など食の魅力が発信できる場をめざした取組みを推進する。

老朽化した施設の長寿命化を図るとともに、施設全体のLED化を実施する。冬季のテナント閉店時に利用者が急減しないよう、冬季営業店の情報発信や観光資源の掘り起こしを検討する。

道の駅の使用料改正は、やむを得ず商品価格へ転嫁された場合、本施設の入込客数の減少が見込まれ他の施設への波及も懸念される。将来的な実費相当分の負担を視野にテナント会と段階的な使用料引上げ（激変緩和措置）について協議をすすめるとともに、コロナ禍以前の入込客数である70万人台を当面の目標とする。

開拓記念館は、道の駅のコンセプトの一つである『「美味しい」「楽しい」がいっぱい！』をふまえ、更なる「食」の充実を目指し飲食店の出店を募集し、令和8年度から出店が決定した。

道の駅指定管理者である村観光協会が中心となって「食」や「景観」といった村の観光資源を活かした事業を創出し、既存のファンはもちろん新たなファンを獲得していく。

また、観光客が村のどこに魅力を感じ来村しているかを分析し、今後の観光振興の方針策定の参考にするためアンケート調査等の精度を上げ実施していく。



道の駅なかさつない

表一 1 道の駅「なかさつない」入込客数

(単位：人)

年度・月別	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	年度合計
令和2年度	30,644	44,457	59,627	77,363	94,068	71,503	66,461	36,636	6,485	2,952	5,897	11,880	507,973
令和3年度	48,225	78,184	63,955	75,375	78,849	63,128	61,729	34,551	6,802	3,057	5,766	11,248	530,869
令和4年度	59,676	94,144	71,616	82,134	91,529	78,948	67,176	38,279	6,863	5,244	7,936	16,801	620,346
令和5年度	61,231	102,202	79,873	94,370	96,709	80,366	74,630	42,686	8,021	5,075	7,658	15,822	668,643
令和6年度	60,795	89,925	78,778	83,374	99,610	85,194	73,225	45,447	7,870	5,433	7,969	15,380	653,000

2 札内川園地

【現状】

中札内村観光のシンボルである札内川園地は、国道236号線から札内川上流へ道道静内中札内線を通して20kmのところに位置していることから周遊するうえで交通の便が悪く、場所もわかりにくい。また、利用者ニーズの多様化が進んでおり、他の観光地などに流れている状況にある。一方で、来園者は絞られているものの、ピョウタンの滝など雄大な自然を求めるリピーターや自然派志向のキャンプ客には人気の観光地となっている。観光庁の「旅行・観光消費動向調査」によると、日本人、訪日外国人問わず旅行中の支出のうちコト消費（娯楽等サービス費など）の割合が増加傾向にあり、魅力的な体験型イベントを創設できれば誘客につながる可能性が高い。

令和3年度より指定管理者制度を導入し、キャンプ場を安全・安心に利用いただき、雄大な自然を快適に体感していただくことを目的にキャンプ場は有料化・予約制としている。これに伴いホームページを整備し、インターネットでの予約を可能としている。週末には日帰り客も対象とした各種体験型のイベントを行い、キャンプ客以外の来園者の誘客につなげているほか、安全登山対策として熊スプレーのレンタルや、ココヘリ（山岳事故発生後に公的機関と連携して捜索を開始し、早期発見による生存率を高めるサービス）のレンタルも行っている。令和6年度には長年の懸案事項であったトイレ・炊事場の整備を行い令和7年度より運用を開始し、利用者から概ね高い評価をいただいております。指定管理者制度導入以降のキャンプサイトの入込客数も3千人以上をキープしている。

平成2年に建設した日高山脈山岳センターは、30年以上が経過し老朽化した施設の改修等が必要な状況である。

日高山脈襟裳十勝国立公園指定の好機を活かし、新たなアウトドア等の拠点として更なる魅力向上が求められる。今後も国立公園化に伴う登山者の増加が見込まれることから山岳情報の発信や、環境に配慮した携帯トイレの普及啓発等が不可欠である。

日高山脈山岳センター内のガイドや札内川上流地域の観光振興等に係る業務を担う「日高山脈専門員」を地域おこし協力隊として令和7年度に2名採用している。

【課題】

何度も足を運んでいただけるよう、口コミによる入込み客を伸ばす取組みなども必要であるが、ヒグマの生息域に近いことから利用者の安全性確保のためヒグマ対策についても考えていく必要がある。

また、日高山脈の国立公園化に伴い、園地を拠点とした滞在時間を延ばしてもらうためにも、自然体験メニューの充実や山岳センターの展示物の見直しや機能強化、上流の札内川ダムと連携した事業なども今後において必要である。日高山脈への登山者の増加が見込まれる

が、非常に急峻な山であることから山岳事故の懸念もある。また、登山未経験者が簡単に楽しむようなトレッキングコースはないため南札内岳が候補地として挙げられるが、山頂の眺望は悪くヒグマの生息域でもある。ただし、欧米系の外国人は、トレッキングを好む人も多く日本人が抱く「登山」とは別の感覚をもって山に入ることが推測されるためコース設置の余地はある。

施設内の展示物や山の状況を案内できる日高山脈を熟知した職員の配置が必要であり、資格取得などを促していく。

施設は、老朽化が進んでいることから限られた財源の中で優先度を決めて修繕する必要がある。日高山脈襟裳十勝国立公園指定後の好機ではあるが、施設を改修し展示物を見直せば入込客数が増加するという保証はない。

【今後の方向性】

国立公園内にある札内川園地並びにピョウタンの滝を村の重要な観光資源の一つに位置づけ、その魅力や日高山脈の情報、ヒグマの出没情報等をインターネット等で発信するとともに、札内川園地にふさわしい自然体験メニューを考案し、雄大な自然を求めて訪れる自然派志向の来客者の利用増加・滞留時間延長を目指す。キャンプサイトの利用料金の改正などを実施し、入込客数の対前年比増の達成へ向けたあらゆる手段を検討する。

日高山脈の魅力や施設を案内できる山岳ガイドを育成し、村内外の子どもたちの教育活動の場として活用いただける体制を整える。「日高山脈を学ぶ場所」といえば「日高山脈山岳センター」と同義で捉えていただけるよう十勝管内関係自治体を中心に利用を呼び掛けていく。

老朽化した施設については、優先順位をつけ必要に応じた修繕をしていくこととし大規模な改修等は当面予定しない。また、山岳センターの展示物の見直しについては、補助金等の必要な財源を確保したうえで実施することとする。

登山未経験者が楽しめるようなトレッキングコースの設置は、行政機関と連携を図りながら需要を精査し整備の必要性について検討を進める。

このほか、札内川園地上流に位置する札内川ダムと連携を図り、周辺一帯の利活用や連携事業を検討する。

国立公園の保護及び利用の推進を念頭に今後の事業のあり方を検討していく。

表一２ 札内川園地入込客数状況

(単位：人)

年度別	山岳センター	バンガロー	キャンプ場	住箱	その他	利用者合計
平成 27 年度	6,501	1,059	1,624		5,422	14,606
平成 28 年度	5,458	919	2,530		2,732	11,639
平成 29 年度	7,793	495	3,475		2,333	14,096
平成 30 年度	8,439	471	3,491		3,364	15,765
令和元年度	9,640	481	4,908		3,245	18,274
令和 2 年度	8,293	382	6,653	153	11,972	27,453
令和 3 年度	5,547	350	3,679	229	3,757	13,562
令和 4 年度	10,424	504	3,870	314	9,150	24,262
令和 5 年度	11,671	597	3,743	298	15,942	32,251
令和 6 年度	10,407	532	3,547	298	6,129	20,913



中札内村観光のシンボル、札内川園地「ピョウタンの滝」

3 一本山展望タワー

【現状】

一本山の頂上にある展望台からは、雄大な日高山脈や防風保安林に囲まれた農村原風景が一望でき、隠れた観光名所となっている。また、展望台への散策路はカタクリの群生地となっており訪れた人を楽しませている。

【課題】

展望台に向かう階段は手すりも含め老朽化が進み、危険な状況にあり「日本で最も美しい村」連合の再審査の際にも指摘を受けている。また、一本山の駐車スペースまでの道は整備されておらず、車のすれ違いは困難を極める。過去には防災ダムから中腹の休憩所に繋がる階段があったが、道の崩落等により使用できない。

また、ヒグマの出没地域であるためヒグマ対策も必要である。

【今後の方向性】

十勝平野が一望でき日高山脈の眺望も望めることから貴重な景観ポイントである。ただし、課題も多いことから観光スポットとして PR していくには十分な注意が必要である。利用状況等（月間50～200人程）を考慮し、利用者に危険がないよう必要最低限の整備をしていく。



一本山展望タワー

4 桜六花公園

【現状】

平成11年に六花亭製菓から寄贈されたエゾヤマザクラを植え整備した桜六花公園は、整備から20年以上が経過し、開花時期には桜が咲く丘として本村の観光資源の一つとなった。平成27年に展望台、駐車場を整備、令和4年度には駐車場を再整備し、20台程の駐車が可能となった。

令和元年度からは開花時期付近にイベント「桜のある休日」を実施し、桜の名所としての

認知度が向上しており、近年は、スタンプラリー等で集客を図っている。

令和7年度のスタンプラリー期間中の1日平均駐車台数は188台となっており、多くの観光客が訪れている。

【課題】

桜は病気等の発生により伐採することがあるため、景観の維持・充実のため適切なメンテナンス（補植等）が必要であるほか、ヒグマの出没地域であるためヒグマ対策も必要である。

【今後の方向性】

今後も村の魅力を発信する場として、桜の開花時期のみではなく紅葉がきれいな時期のPRも検討していく。

また、桜の名所としての認知度が向上したことから開花時期の観光客による路上駐車等の対策を実施するとともにイベントによる集客に固執せず、インターネットやSNSなどを活用した桜のPRを実施していく。



桜六花公園

V 観光振興とイベント

【現状】

現在、村観光協会が主体となり観光イベントの中心として位置づけているものは、やまべ放流祭や道の駅フェア、日高山脈関連事業、道の駅冬まつりなど多岐にわたる。入込客数を伸ばし効果的な観光PRを推進するうえでイベント開催は有効であるが、本村の限られた財源をふまえて事業の継続を判断する必要がある。

また、PR活動としては、ホテルポールスター札幌や「日本で最も美しい村」連合が主催する「美しい村まつり」での物販をしているほか、SNS等を活用した情報発信を行っている。

【課題】

各種イベントが一過性にならないよう、イベント自体の魅力を更に引き出すことに努めるとともに、イベントを通じて地域の魅力（食、景観、アート、花づくり等）を伝え継続的な誘客に繋げる仕組みが必要である。また、本村のファンの獲得、交流人口の増加につながっているかを、イベント開催後に都度精査していく。

また、地元食材にこだわり、新鮮で安全な農畜産物を提供できる機会を積極的に設け、豊かな自然とともに村の食の魅力を発信することが不可欠である。

【今後の方向性】

現在、継続して開催しているイベントについては、一定の整理が図られているものの、引き続き実施方法や時期、具体的な内容等について観光客のニーズや関係人口の創出に繋がっているか等も考慮し見直しが必要である。複数のイベントを開催し、貴重な財源を分散させることは好ましくないことから、開催趣旨が類似するものについては団体等の垣根を越えて連携していく。また、効果が見込めない事業については縮小・廃止する。盛大な集客イベントではなくとも村の情報（観光コンテンツ等）を提供することで、滞留促進や村の魅力向上につながるものがないか検討する。

観光 PR を含めた集客型のイベント開催は観光協会が主体となり、村・商工会・JA 中札内村・観光業者・商業事業者・住民団体などと連携し、関係者自らが主催者の一員となり、テーマを持った開催方法を推進する。また、各団体において開催されているイベントは、住民参加による開催内容として今後も推進していくこととするが、さらに観光への連動ができないか模索する。

最終的には、イベントをきっかけとした中札内村のファンを増やし、イベントに頼らずとも訪れたいと思っていただける村づくりをすすめる。



見直しを検討する冬季事業「スノーアートヴィレッジなかさつない」

VI 観光推進体制と民間観光施設等との連携

【現状】

村観光協会が発足して40年以上が経過。平成28年度に事務所を道の駅内の豆資料館に設置し、人員についても専任職員を配置し民間視点での新しい取り組みや観光情報発信を行ってきた。令和4年度には道の駅の中心的な建物であるカントリープラザへ移転し、観光情報発信の更なる強化を図っている。

村内における民間の観光施設としては、六花亭アートヴィレッジ中札内美術村、六花の森、花畑牧場、グランピングリゾートフェリエンドルフなどが挙げられ、それぞれにおいて特色を持った事業と運営努力により一定の入込客を得ている。

村内随一の集客力を誇る道の駅は、観光協会が指定管理者として道の駅フェアなどのイベントを主催するほか、ピータンのトピアリーや花壇の整備を行い「花の村」として来場者を楽しませている。

近年は、(株)そらや日本航空(株)(JAL)といった民間企業と包括連携協定を締結し、新たな地域振興・観光政策を展開している。ふるさと納税型クラウドファンディングによる事業「ばん馬とのふれあい」や、サイクルイベント「十勝中札内グルメライド」、羽田空港での「北海道なかさつない村フェア in 羽田産直館」の開催などが好例である。このほか、NPO法人「日本で最も美しい村」連合に加盟し、特に道内加盟自治体と連携した取組みを推進しており、イベント「日本で最も美しい村まつり」等へも出店している。

令和6年の日高山脈襟裳十勝国立公園指定や、令和7年の帯広と韓国を結ぶ国際定期便の就航など本村の観光にとっては追い風となる。こうした好機を活かせるよう移動手段の確保はもちろん受け入れ体制の充実が求められる。

【課題】

観光協会は、村の観光推進の旗振り役として村内関係機関（個人経営者、JA、商工会、村）や民間観光施設、飲食店、住民団体等との連携を図りながら、独立した組織として、観光資源の掘り起こしや新たな観光メニューの創出、誘客宣伝などの取組みを進めることが必要である。

村内には優れた民間観光施設が点在しているが、移動手段が限られており自家用車やレンタカー、民間のツアー等に頼らざるを得ない状況にある。また、包括連携協定を締結した企業とは、事業ごとの一過性の関係ではなく継続的な連携体制を構築することで、新たな発想による事業展開が期待される。

また、道内の「日本で最も美しい村」連合加盟自治体で構成する「日本で最も美しい村づくり北海道連携会議」は横の繋がりが強く連携事業を実施してきているが、自治体間の相互交流など今後の事業展開を期待したい。

【今後の方向性】

観光事業については、村観光協会が主体として今後の観光振興全般に関しての旗振り役と

なり、民間組織としての感覚や発想を活かしつつ、機動性と専門性を発揮し、観光の振興に向けた取組みを積極的に展開する。

村観光協会の自立をさらに推進するとともに機能面での活性化を図り、組織強化・体制の強化を進め関係機関・村内事業者などの連携と支援等の役割を發揮しながら、あらゆる村の資源を活用した個性と魅力ある観光スタイルの確立を目指した取組みを行い、独自の収益事業などを意識した事業展開を推進する。

村観光協会がコーディネーターの役割を果たし、民間同士又は官民一体により横のつながりを持った各種情報の共有化を進める。また、観光ニーズや他地域との差別化を図るため、安全、安心な地場産農畜産物を活かし、「食」を通じて村の魅力向上が図られる取組みや高付加価値化、消費拡大を推進する。

包括連携協定を締結した民間企業を筆頭に継続的な連携体制を構築し、本村の観光資源を最大限生かした「十勝中札内グルメライド事業」「地域プロモーション事業」といった事業をブラッシュアップするなど新たな事業を推進する。今後、訪日外国人への対応も求められることから、キャッシュレス決済や多言語対応についても推進し、民間企業の新たな発想・ノウハウを取り入れながらまちづくりを進めていく。そのほか、「日本で最も美しい村」連合のつながりを活かし、加盟自治体同士のイベントへの出店や道の駅での特産品の販売などについて検討する。